
花咲くアーモンドの小枝

山本爛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花咲くアーモンドの小枝

【Nコード】

N6328D

【作者名】

山本爛

【あらすじ】

あの日あの輝かしい親友は僕の知らない間にひっそり死んだ。僕は彼に何を残してやれたんだろうか。思い出すのは中途半端な生活に、中途半端な恋をする僕。僕はもう僕の人間性がうっとおしくてたまらないのです。

第一章

僕は、どれだけの時間を腐らしてきたんだろう。僕が生きてきた時間は瑞瑞しさもなく青黒く鄙びてただ不気味な固形になって横たわっている。僕は一体その賢い頭で何を見て何を知った気でいたんだろう。あまりに弱くて、愚かなひとりの俗物。取り返しのつかないことがこの世にはどうやらある。完璧な人生なんてありえない。そんなこと分かっている。つまらなくて、どうしようもなく、そんなもんだらう。でも、僕は、もっと幸せに生きられるはずだった。それを拒んだのは僕だ。だから腐った。

「これが好きなの？」

「え…。」振り返ると若い女の人がいた。この美術館の関係者なのは間違いない。スーツ姿でここの美術館の委員会のバッヂをつけている。

「ゴーギャンの代表作。色彩が鮮やかで神秘的ね。あたしの好きな画家よ。」

そういつて彼女はふふと微笑んで俺を見る。

「市田さんの息子さんでしょうか？何万人という人がこの絵を見にやってくるというのに、お偉いさんの息子さんでだけで誰よりも早くしかもこんな貸し切り状態で見られるなんてずるい子ね。」

「あの…。」

「大きい絵でしょう。これはね、右から左へ、『我々はどこから来たのか』『我々は何者なのか』『我々はどこへ行くのか』という思いを描き表わしているの。知っているかな。」

静かな美術館。両親が美大卒で学芸員としてそこそこの地位だから僕は自然と昔から美術館や博物館という空間が身近にある。残念ながら特に僕には絵の才能は養われなかったが僕は依然としてこの空

間が好きだ。この空間は僕にとって柔らかなタオルケット。でも今はこの空間でさえもすこしだけボロになった手触りの悪さを感じる。「そうなんですか。」遅れて僕は気のない返事をする。

「浮かない顔ね。何か辛いことでも？」

「はい。親友は死ぬわ自分の人間性がうっとおしいわで死にたいと思ってます。」と言ったらなんて言うだろう、とふと思った。「命を軽々しく扱わないの。」なんて怒鳴るんだろうか。そうしたら僕はほら来たと言わんばかりに、この女に対して冷笑的で卑屈な想いを描いて「なんにも分かってなくせに。」と曲がった悦に入るような傲慢な人間に戻るのだろうか。まあ、でも怒鳴られることはないだろうな。お偉いさんの息子さんだからな。

「いえ。なんにも。」微笑までオマケしてそう答えた。

あの日は雪が降っていた。「雨降ってんじゃん。」って誰かが言っていたけどあれは雪だったと僕は今でも思っている。黒いワゴン車の窓ガラスに跳ねた小さな滴の中でチラチラと光る歪な結晶がすうっと消えていったのを僕は確かに見ていたんだ。

あの日、レットが死んでいた。死んでいた、というのはその日は葬式だったから厳密に言えば死んだ、のは前日だからだ。相当苦しんだらしい。といってもレットは病気で死ぬような繊細な人間じゃない上にバカだったからやんちゃして事故って死んだらしい。連絡を受けたときは驚いた。知っている人が死ぬことはどんな感情よりも先に驚くもんだから僕も驚いた。「え？あいつが…？ちよつとあの…はあ…信じられないんですが…。」敬語なのは相手がレットの親御さんだったからだ。親御さんから直々に連絡を受けたということとはつまり僕は彼にとって重要な存在だったと認識されていたということを意味している。だから僕はあの日いかにも死んだよ！的な黒光りのワゴン車に乗って彼が焼かれて灰になるところを見届けるまで同行する途中、さっきからしきりに降っているのは雪なんだな

あと理解することになる。

レットとは高校の時に出会った。いかにも家庭環境に問題のありそうな風貌とオーラで魅力的な気だるさを持ち合わせながらも親しみやすいやんちゃな笑顔をふとした瞬間に繰り出すことを忘れない人間だった。僕が始め彼を見たときは「あー、こういうやつって学校に一人はいるんだよな。」それだけだった。でもなんとなく連れ合いになるんだろうな、とは思っていた。こういう人間は自分と似たような風貌で相方を探す。ならこのクラスでは僕だな、と感じた。こういう人間、に限らないのかもしれない。若い人間の残酷さがここにある、と僕は思っている。その人が持つ風貌と人間関係、雰囲気、学生特有の「身分」で価値を見極め自分と相当かを瞬時に査定し友達の契約を結ぶかどうかを判断するのだ。このビジネスは今後の生活のすべてを決める死活問題であるから皆必死である。ビジネスに漏れた人間、もしくはビジネス能力のない人間は、下等身分として今後を生きること必至だ。それはあまりにも屈辱的でアイデンティティとやらを確立しなければならぬ僕たちガキにとつては地獄としか言いようがない。大概の人間がこの窮屈な社会制度に内心嫌気がさしているにも関わらず、下等であることを避けるためだけに今日も愛想笑いをやめない。

特に女の方がそれが顕著に現れるようだ。だから僕は女というものを生物的に好きだけど、人格的に好きではない。「市田君、好きよ。」なんて清純で愛らしい顔で言われたこともある。でも白いハンカチは漂白剤を使っているから白いのだ。透明な水は除菌しているから、という例えもいいな。この女は僕にビジネスをしているのだ。

『僕の彼女という契約書を振りかざしてまたひとつこの身分社会で押し上がるうとしている。それとも『僕』じゃなくて『レットの友達』だったりして。じゃなきゃ、だってこんな冷め切った人間を

好きになる理由なんてどこにもない、て自分でも思うぞ。そう思うとなんとなく冷めた。それは、ともかく。さてと、奴と契約を結ぶかな。やり方は分かりきっていた。僕はビジネスに成功しやすい気質である。目が合った。レットの思考回路が手に取るように分かっていた。レットがにやりと笑った。その口角が契約完了を示していた。どうぞ、よろしく。「こんな僕」だけだ。

レットというのは「黎人」という彼の顔に似合わず涼やかな名前から来ているが、実のところ彼の尊大な様子が周囲を使役「LET」している様で周囲に「劣等」感を与えることから由来しているというのはつまらない有名な通説である。レットは僕が親しみと冗談をこめて言った「レット君」が始まりなのでLETや劣等から起因しているというのは真実ではないが、そこが示すところは僕の想像を超えない範囲で豊かな表現であったので否定はしていない。レットが周囲に定着しはじめた頃僕は「イチ」とか「いつちゃん」と呼ばれ出した。学生時代に特有のあだ名が示す裏にある深い風刺の真意の後付に脅えたがやはりそれは単なる僕の「市田」という苗字からにすぎないことを知ってますます僕は僕らしくなった。

だが僕たちは真剣にあだ名で呼び合うほど、恥さらしでも疎遠でもなくなり普段は苗字を呼び捨てしていたからこのあだ名は呼び名ではなく本当の意味で僕たちの象徴になった。レット君、いつちゃん、と呼ぶときは何か含みがあるサインであることを暗黙に理解し、この暗黙さこそ周囲には親密に見えることをも理解したから僕たちは親しくなっていた。より親密になるには実は内面的な気持ちよりも外部の評価が重要である。「あの二人ってなんかいいよね。」と評価されることでそれに応えようとするからだ。

でもそれ以上に僕はレットという人間を好いていた。たまにめんどくさい奴だ、と思うこともあるにはあったがそれはレットを好いているということと矛盾していなかった。レットが意外にも実は

歳の離れた妹を溺愛し純愛にどうしようもない理想を抱く根はストイックな人間であることを知って、おもしろいじゃん、と思ったのだ。

だが、それと同時に僕はレットの付加物であることをも強く意識していた。レットは目立ちすぎていた。みんながレットを見ていた。レットが醸し出す雰囲気はすべてを圧倒していた。女は口ほどに健全なものを愛さないからレットは注目の的だった。女がその素直になりきれない感情でレットをどんな評価に下したとしてもそれはレットが際立った存在であることの証拠にしかならなかった。レットの一番の友人であることは僕の存在を一段と知らしめ、レットに気圧されない存在としても一目置かれはしたが、僕は僕がレットの放つ輝きに埋もれ彼の影になっていくことを感じていた。

僕たちがそれでもなお友人であり続けたのはお互い居心地の良さを知っていたことはもちろん、レットの純粹さと僕のプライドのためには他ならない。レットは僕を信頼していたし、僕はそんなことでレットを正々堂々と逆恨みできるほどプライドの低い人間ではなかった。レットが僕との間になんらかの差を意識し主従関係を強いることはありえなかった。そんなレットに僕は信仰心まがいなものを起こすことも気兼ねすることもなかったし僕は僕で自分の立場を甘んじて受けることで僕を守っていた。僕は僕のようなスタンスの取り方を悪くないな、と感じながらも僕の人生を空っぽにするような大きなミスを犯しているのではないかと脅えていた。

うだるような日だった。誰もいないグラウンドからは塵気楼がゆらゆらと立ち上る。裏手にあるけやきや松の雑木林ではその青く茂った木々の隙間から奥地に並んだ民家の瓦屋根に当たった光が水面のようにキラキラ差し込む。湿った風があたり一面に鳴り響くセミの

声を運んでいた。僕の五感のすべてが暑さを訴えていた。そんな中僕たちは夏の補習を強制的に受けさせられていた。

「暑い。市田アツイ！」ここにも一人今日も飽きずに僕に暑さを訴える男がいた。

「おー。分かってる。夏らしいからな。」僕は途中で買ったヨーグルトタイプの飲み物のストローを口に咥え頬杖についてグラウンドをぼんやりと見ていた。

「もう暑いのが飽きたんすけど。暑い。だるい。セミうぜ。帰ってー。なあ、暑くね？」

レットはカッターの襟を乱暴に掴んで手をぶらぶらと揺らしてそこから生まれるほんのちよつとの風を必死に送っていた。

「なあー。いつまで暑いんだろなあ。」

「るせーな。もう後二ヶ月たったら十月じゃん。それに地球は今世紀中ごろに滅びる予定入ったらしいしな。」

詳しくは知らないけど昨日やってたバラエティ番組から聞きかじったことをそのまま言っただけだった。レットは宇宙やら恐竜やらタイムスリップやらとにかく規模のデカイ話が好きな男だったから「マジかよ！！」と期待を裏切らないリアクションが返ってくるのは分かりきっていた。が、返事は意に反してなかなか返ってこなかった。不思議に思っただけでレットを見ると、レットは怪訝な顔をして「別にいんじゃないね。」と言った。

「なんだ。いいのかよ。らしくないな。」

「だって俺死にたくないもん。地球から勝手に死んでくれてありがたいな。誰も生き残らないんだったら俺死んだってことになんないじゃん。」

「はあ……。」

「『レットが死んだ』なんて言われることもないんじゃない。」

「まあ……そりゃそうだな。何が嫌なのかは全く分からねーけど。」
「いつちゃんはバカだから。」

僕は正直言えば、いつ死んでもいい、といつも考えていた。死にた

い、と積極的に思ったことはなかったが今日死んでも別に何にも惜しくはない、それくらいに考えていた。別にそれは日々充実していたからでも辛酸な日々を送っていたからの言葉でも決してない。イジメを受けたこともなかった。大きな失恋をしたこともなかった。それだけじゃない。生活するのに困難を感じるようなことは何もなかった。友人と騒ぐことは楽しかったし女とのやり取りに癒しを見出すこともたまにあった。だが家に帰りひとりになってみるとどうと疲労が溢れ出していた。そういう時に僕は疲れと一緒に生きるという意義をも吐き出してしまっていたようだ。おそらくそれは僕が死というものに対して身近に感じていなかったゆえの甘えからなのだろうが、それでも自分が死に際になって、死にたくないと足掻いている姿は想像できなかった。

もしくは、今思えば、恥ずかしいことに、『いつ死んでも構わない』そのスタンスは僕にほかの俗物とは違う僕であることを実感するのに十分な効果を発揮するであろうことを無意識的に理解していたのかも知れない。この時期の少年少女というものは「違い」を何よりも重宝する。厳密なビジネス・フレンド社会のおかげで思考や外見がみな自分と似てしまうがために、自分と他人の違いをはぐれ者にならない程度で模索しようとするのだ。僕も結局はその範囲から抜け出せなかっただけのことである。

なんであれ『死にたくない』という気持ちだけはどうしても僕の理解できない域だった。それを目の前のこの男は感じている。不思議な気分だった。こんなに近くにいるのにこの男の胸のうちには僕の感じ得ない想いが溢れているのだ。そして分からない僕にこんなにあっさりとバカだと言っただけのける。死にたくなくて当たり前だと信じている。

「それに俺は後半世紀よりも二ヶ月のほうが長く感じるわ。あーずっと八月だったらどうしょ。死ぬ。あ、なあ。それ、ちょうだい。」

レットの葬式は厳かに行われていた。遺影はとても写りの良いもので、満面の笑みだった。葬式に集まった人たちは涙ぐみながら「いい顔じゃないのぉ」とかなんとか口々に言っていたが僕はあの写真を知っていた。確かレットが死ぬちょっと前に撮った一枚で僕も写っていたはずだ。もつと詳しく言えば散々下ネタで盛り上がった後に撮った一枚だ。「うお。この俺超力ワイイんだけど。保存版だろこれ。」って本人も言っていたやつ。

(まさか遺影に使われるなんてな…)

僕は泣きたいような笑いたいような衝動に駆られ代わりにグツと目を瞑り首をもたげた。坊主がよむお経と啜り泣きだけが会場に響いていた。レットはお経の意味分かってんのか？ブスが泣くなよしんどいな、とキレてんじやないか？そんな考えが浮かんでは消え虚しさだけが僕を襲った。

僕はもう一度遺影を見た。あいつ笑ったらそういえばえくぼ出来んのな。髪型決まってるんじやん。でもよく見たら口テカってるそこは若干きもいぞ。目も、たれ目になってんじやん。なあ。レット。お前、マジ楽しそうな。意味が分かんねーな。死にたくなかったのにな。死んじまつたな。なんでだろうな。

参列者は僕の知っている人から知らない人まで多くいた。同級生たちはどれもが涙を流していた。よく見たことのない見た目も頭も悪そうな女や男もみな事前に打ち合わせたかのように肩をがっくりと落とし悲嘆極まりない様子を作っていた。彼らはみな揃って悲しみという感情しかその胸の内に渦巻いていないようだった。悲しい、あなたが死んで悲しい、そうひたすらに純粹に訴えていた。

その中にひとりだけじつと遺影を見つめる女に目が止まった。涙も流さずただじつと静かに眺めていた。白い肌がほんの少し青ざめ美しい曲線で描かれた目の淵には赤みがさしみるみるうちに濡れだしてきていた。そして彼女は深く目を閉じ再び開けたときにはそこには凜とした黒い瞳だけがあった。そうして何度も何度も自分を立て

直しているようだった。白、青。赤、黒、白、青。赤、黒。その四色が混ざって混ざって結局は印象派がもつとも嫌うような言葉では表現しきれない暗い色を作っていた。

ここの誰よりも深い悲しみ、孤独でもそれは表していますか？と僕は心の中で尋ねてみたけど、もちろん彼女はこちらを見ない。でもなんとなく純一色の黒が会場を包む中、複雑な色合いを出す彼女に素直な気持ちになったので、レットの『死にたくない』はあの眼の淵あたりから生まれているのだろうと少年は考えた。

レットの心配は杞憂で終わり時は十月になり二学期が始まった。現代文は見田宗介の『青春 朱夏 白秋 玄冬』の講読から始まるようだ。「あなたはいま幸福ですか？」と聞くと「幸福だ」と答える人が八割を超えるが現状はそうはあるわけがない。確かに「満足感」を指標として考えれば「幸福」なのだけど、それは「非常に充実した幸福感」とは言えない。つまり強い幸福感の持ち主はむしろ明確な「不満」をもっており、この不満との緊張関係の中で充実した人生を送っているのである。とかなんとか。

その中で「パスカルは『人は、獲物より狩りを好む』と言った」ということが触れられている。

その時レットはお盛んだった。花盛り満開だった。でもどの子とも「飽きた」とか「本気じゃない」とか「なんか違うんだよね」など勝手に言っただけで終わっていた。「罰当たるぞ。」とは僕も言っておいたが、そこは男同士。特に余計な詮索はしない。それにいつもきつかけが相手からで本気になれないのも無理ないのかもしれないと思っていたからだ。今までの子はレットと一緒にいたい人でなくて一緒にいれる人だったのは様子を見ていれば僕にだって分かる。

『人は獲物より狩りを好む』ね。パスカルはなかなか分かった男だ。レットもきつとそのタイプだ。レットは自分から好きになった人には大事にするんだろう。僕は四時間目＋現代文というダブルパンチ

にやられすやすやと眠るレットを見た。この寝顔には僕にない情熱的で優しい気質がある。

体育祭も適当にし終えて、暇な日々が流れていた。レットはよく食べるし、僕はよく遅刻する。いつも通りだった。季節はやっぱり移ろうばかりで、すっかり肌寒くなり教室にはストーブが現れレットを喜ばした。ストーブの前に陣取るように僕らは他の友人も混じえて固まりになってどうでもいいことばかりを話していた。そんなある日、僕らが二人で今日も飽きずにストーブの恩恵を与りながら金が欲しいなどとつぶやいているとレットは少しの沈黙の後躊躇うように話し出した。

「なあいつちゃん。俺、気になる人できたかも。」
レットはきゅっという気持ちの悪い素振りを見せて僕に報告した。

「…まじで？」とうとうレットが狩りに出るらしい。おそろおそろ僕は獲物を聞いた。

「で…誰？」

「響子。」

「上田？四組の？」

「そ。キョーコ・ウエダ！びっくりした？」

大掛かりな狩りのようだ。上田響子はよく喋ったことはないけど、ハンカチの白さを強調しない美人だった。中途半端な気持ちでは近寄れないオーラの持ち主。控えめだけど芯の強さを感じる。目立つたことはしないけど、人目を惹きつける。よく言えば高嶺の花。悪く言えば面倒くさい女。人格的に嫌いでない。

「いや…うん。意外だった。でもなんで？仲良かったっけ？」

「これからなるの。」
拍子抜け。

「アドは？」

「今から聞くの。」

「彼氏は？」

「いないことを願う。」

彼の狩りは無鉄砲のようだった。

上田響子はどうやら見た目よりも物腰の柔らかい女であった。レットのいきなりの申し出に戸惑いはしたようだが、アドレスの交換には二つ返事で了解した。それでもやっぱりレットとある程度の距離を保っているのはさすがというか。レットはこの難攻不落な獲物狩りを大いに楽しんでいた。「絶対フラれる。」とか弱音を吐きながらも顔は楽しそう。多分今こいつに「幸福ですか？」と尋ねたら「幸福です。」と答えるだろうな、と僕は思った。

それでもなんとか一緒に帰る約束を取り付けたようでレットはその日一日中そわそわしていた。でも一筋縄ではいかないレットは、そんな日に限って教師から呼び出しをくらい掃除もそこに強制連行されていった。東棟の生物室の掃除を終えた僕はひとりで教室へ荷物を取りに向かった。

ひとり教室の前でぼつんと佇む彼女と目が合い、とりあえず「あいつ、呼び出されてるから遅れるよ。」と伝えた。

「そうなんだ。長くかかりそう？」

僕はレットを連れて行った教師を思い浮かべる。野田だ。

「さあ……。どうだろう。分からない。」

嘘だ。長いに決まっている。経験済み。

ひとりで小一時間も待たせられるのかと思うと哀れに思えてきたが話すこともないし、話すには厄介な相手で、とりあえず荷物を取って『上田待ってるよ』とレットにメールを入れて教室をあとにすることにした。

「じゃ。すぐ戻ってくるよいいな。」

僕が立ち去ろうとした瞬間、「あのさ。」と意外にも彼女の方から話しかけてきた。

「何？」

「あのさ、市田くん家って、美術関係のお仕事してるんでしょ？」

「…そうだけど。なんで？」

「あたし、小さい時から絵画教室通ってるの。その先生がね、市田くんのお母さんとお友達らしくって、よく話に聞いてたの。」

世間が狭いというのはおばさんのネットワークの広さを表している
と僕は思う。

「そうなんだ。」

「市田くんも絵が上手？」

「全然。」

「美大には行かないの？」

人の話はあまり聞かない性質のようである。レットはおしゃべりなのに大丈夫かな。

「絵が下手なのに行くかよ。」

「親から美大に行きなさい、とか言われたい？同じ道進んでほしい、とか。」

「親は自分の夢が十分叶ったら子に押し付けたくないみたいだよ。子もこんなだしな。」

上田は困ったようなおかしいような顔をみせた。

「上田は美大志望なの？」

「ううん。行きたいのは山々んだけどね。でも親が趣味に留めなさいって。」

「そうだな。画家は親孝行者で先のことを考えられる人じゃなれないな。」

「あたしはなれないって事を言ってるの？」

「どっちがいい？」

「どっちであつてもなんかシヨックね。」

彼女は不満げに僕を見た。僕はふっと笑ってそれには答えず話を変えた。五分くらいなら待ちぼうけを解消してやれるかもしれない。

「今度、東京でゴーギャン展開かれるかもだよ。」

「ほんと？」眉間がぱつと開く。

「かも、だよ。かも。まだまだ先のことだから。たった三ヶ月ほどの催しでも準備は長くて三年かかるんだ。でも実際三年も準備にか

けられる余裕はないからもつと短くなる。今回はゴーギャンを企画してるんだって。成功するといいけど。」

「成功しないときもあるの？」

「開かれるまでが大変なんだそうだ。所蔵してる家や他の美術館の協力が必要だからね。ゴーギャンとなると所在調査と出品交渉に忙しくなるんだらうね。仮に協力が得られたとしても輸送手段とかの段取りもあるんだらう。」

「大変なのね…。でも成功したら絶対に見に行くわ。」

「ほんとは、ゴッホとゴーギャン展を考えてたんだって。何年も前にアムステルダムで開催された時は、大好評だったらしい。どうしても日本でも開きたいと考えたらしいんだけど、経費が半端なくて断念。」

「そうなんだ…。」

「そうなの。」

一分もかからなかった。なんか、なんか恥ずかしいぞ。長々と語り終えて。なんか、気まずいぞ。しかもゴーギャンで。

彼女は僕を値踏みするようにじっと見詰め「市田くんほんとはおしやべりなんだね。」とか言っただけでにっこり笑うし。

彼女はささやかな復讐に満足したようで「早く開かれるといいな。」と言っただけで窓に細めた目をやる。

「あたし、ゴッホも好きよ。実は正直言うと、ゴッホの方が、かな。空気読めてないかもだけど。」

彼女はさつきと同じ顔。困ったような、おかしいような。

その後も彼女はおしゃべりを続けた。僕は黙って聞いていたが、時間が経つにつれて彼女への一時間のひとりぼっちの哀れさは消え去り、代わりにひとつの懸念が浮上し僕は違和感を覚えずにいられた。三十分を過ぎた頃にはそれらはぐつぐつと煮えたり僕らの腹のなかで気持ち悪く蠢いていた。

そんな僕の気持ちとは裏腹に彼女はゴッホのあれが好きだの、絵画教室は楽しいだの、市田くんはどうして部活に入らないのかだの、

市田くんは絵を描いてみるべきだの、と話し続ける。僕は否応なくそこに彼女の逆説的で決定的な想いに感じてしまい、だから僕はいい間合いを探してこの不可解な女に急いで「もう帰るよ。」と言わなければならなかった。

「最後にひとつだけ質問。」

「何？」

少しだけ期待する。最後だから。ラストチャンス。腹の中も緊張でぴたっと止まる。

「市田くんは何か好きな作品とかある？」

そうじゃない。市田くん、じゃないでしょう。絵の方の話じゃないでしょう。腹の中は活動開始。しかしこの彼女の期待した瞳はとても綺麗だ。

「あるよ。」

「何？」

「ひとつだけだろ。」

彼女はちよつと怒ったようだ。「そうじゃないじゃん。」と口を尖らせた。こつちが『そうじゃないじゃん』なんだけど。

「じゃ。続きはあいつにしてやってね。いい奴だから。」

「ねえ、いつ教えてくれるの？」

僕は三つ目の質問にも答えず手をひらひらとして逃げるように立ち去った。

帰り際僕はいくつかの疑問にぶち当たっていた。どうして上田はレットの話をしていない。初めて喋るわけだから気を使っていたのだろう。と思えばそうなのかもしれないが明らかにあれはレットに関して話さないし話させないし聞かせない、そんな喋り口であった。勿論はじめはひとりぼっちを哀れに思って適当な話題を見つけて暇つぶしをしてやるうという軽い気持ちだった。でも僕としてみれば相手はあのレットの想い人なわけで、あいつとどうなの、なんて奥めいたことの一つは聞きたくなるし、二人という状況を考えればレットに

気兼ねして話の中でだけでも彼を登場させなければならぬようにも感じていた。でもそれを察してかどうかは分からないが彼女は僕がそんな気を起こすとすぐに「市田くんは」なんて言つて僕の気を挫くのだ。だから僕は急いで「いい奴だから。」なんて友情めいた捨て台詞を吐いて反撃を行い逃げなければならなかった。バカでなければ沈黙もひとつの答えだと知る。つまり上田はレットにまるで気がないのだ。

いや、そんなことは承知のはずだったことはそうなのだけど。レットからの話を聞いていても上田の反応はまだまだ好意を寄せているとはお世辞にも言い難かった。でもそれも時間の問題だろうとどこかで思つていた。あのレットにあれだけの情熱を寄せられているのだ。外面がどれほど頑なであつても内心はこの女も緩んできているに違いない、と思つていた。

今まで僕に話しかける人間はどうしても僕越しにレットを見ている気がしてならなかった。こんな時、虎の威を借る狐は彼なりの寂しさがあつたのではないか、と僕はいつも思うのだ。でも虎は虎になつてしまったのだから虎に非はない。この虎野郎！と逆恨みする勇氣はまるで起きず狐は狐としてそれなりに生きていくのだと僕はさつさと諦め、この割り切りの良さにほんの少し誇らしさを持つていた。

そして今ここに虎を鼻にもかけない女が現れた。これは僕が作り上げた身分社会への冷めた見解に納まらない異端児だった。しかし先ほどまでの具合の悪さはこの不可解な異端児の出現への戸惑いによるものであつて、上田という女自身によるものではなかった。すつと腹の中がおさまり少しずつ事の成り行きを理解するにつれ、恥ずかしいことに僕の中で湧き上がったのはどうしようもない心地よさと高揚感だった。

そして僕は以来、上田に対して中途半端な好意をよせるようになる。これはただひとつ「レットを好きじゃないから。」に依ることなのでとても不純で恥ずべきことです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6328d/>

花咲くアーモンドの小枝

2010年10月19日15時08分発行